

感情体験の分析

—嫉妬・憎い・怒りについて—

上杉 喬・榎場真知子・馬場史津

Analysis of Some Emotional Experiences: On jealousy, hatred and anger

Takashi Uesugi, Machiko Kayaba and Sizu Baba

はじめに

本研究の目的は、怒り、憎い及び嫉妬の感情について、それらの感情を最も強く感じた体験の自由記述に基づいて、それらの感情の特徴を分析することである。

人は生きている限り感情的であり、その行動はさまざまな感情によって方向付けられる。怒りは人を攻撃的にし、強い憎しみは人を殺人に駆り立てたりする。嫉妬が人を疑い深くさせ理性を失わせることは、オセロがデズデモナを殺害したシェイクスピアの小説でも知られるとおりである。

ところで、われわれが「感情」と呼ぶものには2種類のものがある。1つは悪口を言われて怒ったり、裏切った恋人を憎いと思ったり、母に可愛がられている弟に嫉妬したりする場合で、さまざまな出来事に対してその場で意識される感情状態、現実の対象や事象により喚起される感情である。もう1つは、過去の体験を思い出すことにより想起される感情状態で、これには実際に体験しなくても想像によって喚起される感情状態も含まれる。

一般に感情研究において、この2つの「感情」は区別されていないが、上杉（1981）は後者の感情状態、すなわち想起された感情および想像による感情状態を「感情イメージ」と呼び区別し、感情イメージに関する一連の研究を行って来た（上杉、1981、1983、1984、1989、1998、2000）。その結果、Plutchik, R. (1960) による基本8感情（喜、望、愛、驚、悲、恐、怒、嫌）に関する研究では、イメージした諸対象（父、母、私、社会など32対象）に共通する因子構造として8感情が、①強いプラス（またはポジティブ）感情（喜、望、愛）、②中性感情（驚）、③強いマイナス（またはネガティブ）感情（悲、恐、怒、嫌）として、数量的に区別され特徴づけられることを明らかにした。また、9年間の横断研究によってこの基本8感情の因子構造が安定したものであることも示され、因子負荷量によって数量化することにより諸対象に対する個人の感情状態（感情イメージ）を感情価（プラス感情・マイナス感情の強さを表す指標）として示し測定することができることを示した。

しかしながら、われわれが諸対象に抱く感情状態（感情イメージ）は、プラス感情 v.s. マイナス感情の軸上に表されるだけでなく、より多様な意味を有するものである。上杉（1998）はこのことを明らかにするために、感情語 18 に対する形容詞（または形容動詞）19 対の SD 評定を求め、その結果、18 感情がプラス v.s. マイナス感情を背景として 1) 苦悩、2) 喪失、3) 動揺、4) 充足、の 4 つの感情状態に区別されること、また感情のイメージ的意味としての諸感情に共通する感情の質が、1) 感性的な質、2) 状態的な質、3) 評価的な質のあることが示された。

この一連の研究は、われわれが体験を通して記憶し保持している感情状態（感情イメージ）に関するものであった。しかし、この感情イメージは基本的に感情体験をその源泉とするものであり、感情体験そのものを検討することなしには感情イメージそのものも十分に明らかににはならない。本研究において、感情体験そのものを検討する理由である。

方 法

1. 調査質問紙

本研究で使用した質問紙は『体験した感情』として、嫉妬、後悔、憎い、満足、屈辱、空しい、愛しい、不安、喜び、苦しい、驚き、恐れ、怒り、寂しい、充実、嫌悪、ためらい、恥ずかしい、悲しい、失望の 20 を挙げ、「あなたの今までの体験の中で、次の 1 から 20 のような感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して、それがどんな出来事だったのか、分かるように書いて下さい。また、その出来事がいつ頃（何才位）の事なのかも書いて下さい」と教示し、『その感情を体験した出来事』を 30 字程度のスペースに自由記述するものであった。本研究では、20 の感情のうちで「嫉妬、憎い、怒り」を取り上げた。

2. 調査対象・時期・手続き

B 大学の「感情心理学」の授業の受講生（2 年生 228 名）を対象に、1999 年 10 月、秋学期授業初日に配布し、翌週の授業に提出という手続きをとった。調査は記名式であった。対象者の性別は、男 98 名、女 130 名であった。

感情体験の分類

1. 嫉妬体験の分類

調査対象者 228 名のうち、嫉妬体験を具体的に記述した者は 215 名（94.3%）、記述しなかった者は 13 名（5.7%）であり、この 13 名中 5 名は「嫉妬体験がない」とする者で、8 名がblank（無記入）であった。

嫉妬体験は、「嫉妬の対象（誰に、または何に嫉妬したか）」と「嫉妬の状況（どういう場合に嫉妬したか）」によって分類できる。嫉妬体験の 215 名の記述内容から「嫉妬の状況（どういう場合に嫉妬したか）」について分類したところ、次の 8 つに分類することができた。

① 父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた場合

例えば、「弟が生まれて、両親の注意が自分だけでなく弟に向いたとき（3才）」、「兄だけ何かものを買ってもらったとき（5才）」

② 自分にとって大切な友達の好意が他の子ども（または他の友人）に向けられた場合

例えば、「仲のよい友達が他の子と遊んでいた時（5才）」、「一番の仲のよい子と高校が違い、自分の知らない子の話を聞いた（15才）」、「友達に彼氏ができて、電話でその話を聞いたとき、つい冷たくなってしまった（20才）」

③ 父母や周りの賞讃が兄弟姉妹や他の子どもに向けられた場合

例えば、「親や親戚の人達が私の前で兄をほめていたとき（6才）」、「親が他の子どもをほめた（6才）」

④ 自分を可愛がってくれる（と期待している）年長者の愛情が他の子どもに向けられた場合

例えば、「入院していた時に自分の担当だった看護婦さんを、新しくとなりのベットに入院して来た同じ年ぐらいの女の子に取られてしまった（7才）」、「近所のお姉さんが他人に優しくしていた（10才）」

⑤ その他、先生などの好意が他の子どもに向けられた場合

例えば、「実家の飼い犬が姉ばかりに媚を売る（12才）」、「先生が別の生徒をひいきにしていたとき（13才）」

⑥ 好意を抱いている異性の好意が他の子ども（または他の人）に向けられた場合

例えば、「当時好きだった女の子を仲のいい友達に取られた（10才）」、「片思いの相手が楽しそうに女の人と話しているのを見たとき（18才）」、「彼女が街中でカッコいい男に振り向く（21才）」、「彼氏が仕事場の女の人の話をしたとき、その女の人に対して（21才）」

⑦ 自分も欲しいものを親しい人（子ども）が持っている場合

例えば、「自分の持っていない玩具を他人が持っていたとき（4才）」、「姉がゲームでいい景品をもらったとき（7才）」、「年下のいとこの方が、お年玉が多かったとき（14才）」

⑧ 自分も欲しい能力を親しい人（子ども）がもっている場合

例えば、「自分がどうやってもトップになれなかった時（かけっこ）。（4才）」、「野球をしていて自分より上手な友人を見た時（9才）」、「自分と同じ年で、活躍しているのを見たりするとき（20才）」

この8つの分類は、「人の好意・愛情に関する嫉妬」（①～⑥）と、「欲しいものや能力に関する嫉妬」（⑦・⑧）に区分できる。

2. 憎い体験の分類

調査対象者228名のうち、憎い体験を具体的に記述した者は217名（95.2%）、記述しなかった者は11名（4.8%）であった。自由記述によって収集された「憎い」という感情を最も強く抱いた体験は、以下の17項目のカテゴリーに分類された。以上の分類カテゴリーは鈴木常元（2001）の抑うつ・怒りに関する分類カテゴリーを参考に作成され、記述のカテゴリーへの分類は、馬場と榎場がまず独立して行い両者に不一致の生じた記述については協議の上決定した。

① 自分の意見が通らない

例えば「親が外泊を許してくれなかった時」「やっと好きになり始めていた習い事を受験のせいでやめなければならなかった」「親がそれまで好きなことをやっていいと言っていたのに、大学に行けといいたした」など自分の意見や欲求が通らない体験である。

② 人からの非難・侮辱

「悪口を言われたとき」「大切な人に傷つくことを言われたとき」「母親に遅く帰って怒られた」

などの体験である。

③ 無視・疎外・孤立化

「友人から無視されたとき」「自分だけが社会から見放されていると感じたとき」「ある女達にずーっとしかとされていた時」などである。

④ 人からの酷い仕打ち

「私の尊厳を奪った人たちに対して」「予備校代を一度も出してくれなかった」「誤診された」など。

⑤ 人からの裏切り

「信じていた人に裏切られた」「彼女に二股をかけられた」「自分の家族にだまされた」など。

⑥ 人・動物からの行動による被害

「嫌がらせをされたとき」「苛められた」「自分とは何の関係もない人に悪い態度をとられた」など。

⑦ 大切な人・物を奪われた

「親友を取られた」「彼氏を取られた」「姉や弟に欲しかったものを取られた」など。

⑧ 親しい人への非難・攻撃

「父が母を殴った」「とても仲のよい友人が他人に怪我をさせられたこと」「友人に家族全員を馬鹿にされたとき」など。

⑨ 自分自身に対して

「高3の時に受験があるのに遊んでばかりで、大口を叩いていたくせに、全て失敗した自分」「パチンコで負けたとき自分が憎い」など。

⑩ 道理に合わないこと

「弟と喧嘩しておねえちゃんなんだからと怒られたとき」「いたずらを自分のせいにされたとき」「バイト先でお金ももらえず、ただ働きさせられたとき」など。

⑪ 他者の身勝手な行為

「自己中心的な友達に振り回されたとき」「父の浮気」「友達にお金を貸したのに返してこなかったこと」など。

⑫ 約束を破られる

「友達が約束を破ったとき」「遊ぶ約束をした兄が、友達の家遊びに行ってしまった」など。

⑬ 喧嘩

「友達と喧嘩をしたとき」「母と始めて大喧嘩をしたとき」「姉と仲が悪かったので、憎くて本当にいなくなればよかったときもあった」など。

⑭ 努力が報われない

「友人が自分より上位の大学に受かったとき」「剣道の試合にて、負けた相手に対して」など。

⑮ 社会的な出来事

「世の中が不況で貧しいこと」「オウムサリン事件のニュースを見たとき」「不正をする政治家のニュースをみて」など。

⑯ なし

「思いあたりません」「憎いという感情はないです」「なし」と記入した場合、なしと分類した。

⑰ その他

「バイト先の店員に対して」「幸せそうな人を見て」「恋人の自分に対する気持ちがわかってし

まったとき」など。上述の16項目に分類できない場合。

3. 怒り体験の分類

調査対象者228名のうち、怒り体験を具体的に記述した者は223名(97.8%)、記述しなかった者は5名(2.2%)であった。自由記述によって収集された「怒り」の感情を最も強く抱いた体験を、「憎い」と同じ17項目のカテゴリーに分類した。各記述の分類は、馬場と榎場がまず独立して行い両者に不一致の生じた記述については協議の上決定した。

① 自分の意見が通らない

「自分のやりたいことを親が認めてくれない」「親が私のことをわかってくれなかったとき」「大学の友達が自分の話も聞かず無謀なことをしたとき」など。

② 人からの非難・侮辱

「友達が自分の気にしていることを冗談めかして言ったとき」「親に学力のことでばかにされたとき」「友達に自分の夢をけなされたとき」など。

③ 無視・疎外・孤立化

「友人だった人に無視されたとき」「理由もわからず無視されたとき」「(私だけ知らせていないために)暴露話に参加できなかったとき」など。

④ 人からの酷い仕打ち

「祖母に日記を読まれたとき」「秘密をばらされたとき」「自分の考えを意図的に間違ったように伝えられたとき」などの項目が分類された。

⑤ 人からの裏切り

「彼氏が浮気した」「友達に裏切られた」「友人が自分をだましたとき」など。

⑥ 人・動物からの行動による被害

「父親の暴力に対して」「いじめをうけたとき」「痴漢にあったとき」など。

⑦ 大切なものを奪われる

「妹に大切にしていた物を壊された」「幼稚園で自分のおもちゃをとられたとき」「財布を盗まれたとき」など。

⑧ 親しい人への非難・攻撃

「自分の両親をけなされたとき」「故郷を馬鹿にされたとき」「妹がクラスでいじめにあっていたとき」など。

⑨ 自分自身に対して

「ピアノの練習で何回練習しても同じところを間違えた」「自分の心の弱さに対して」「注意していたのに同じ過ちをしたとき」など。

⑩ 道理に合わないこと

「自分がしていないことで責められたとき」「覚えのない疑いをかけられたこと」「バイト中、休憩にいけなかった」など。

⑪ 他者の身勝手な行為

「掃除当番なのに全くやらない人を見たとき」「部活で練習しないチームメイトがいたとき」「クラス班別の発表で班員のやる気のなさ」など。

⑫ 約束を破られる

「遊ぶ約束をしていた兄が友達の家遊びに行ってしまったとき」「彼氏が待ち合わせに遅れてきたとき」「友達に約束をドタキャンされたとき」など。

⑬ 喧嘩

「母親との大喧嘩」「友人とけんかしたとき」「兄弟けんかをしたとき」など。

⑭ 努力が報われない

「教習所でなかなか進めないとき」「自分の努力に反して物事がうまくいかないとき」「努力してやってきた課題を全然認められなかったとき」など。

⑮ 社会的な出来事

「最近の様々な凶悪事件に対して」「校則で髪を切らねばならなかったとき」「年金」など。

⑯ なし

「思い当たらない」「体験がない」「なし」などの項目はみられなかった。

結 果

1. 嫉妬体験の分布

表1に、「嫉妬の状況（どういう場合に嫉妬したか）」によって分類した上記8分類の年齢別分布を示す。

1) 嫉妬体験の出現頻度（年齢計）は、『人の好意・愛情に関する嫉妬』が155名（72.1%）、『大切なものや能力に関する嫉妬』が60名（29.9%）であった。

2) 『人の好意・愛情に関する嫉妬』について見ると、出現頻度の1位は「好意を抱いている異性の好意が他の子ども（または他の人）に向けられた」（73人、34.0%）で、2位は「父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた」（48名、21.9%）、3位は「自分にとって大切な友達の好意が他の子ども（または他の友人）に向けられた」（21名、9.8%）であり、「自分を可愛がってくれる（と期待している）年長者の愛情が他の子どもに向けられた」「父母や周りの賞讃が兄弟姉妹や他の子どもに向けられた」「その他、先生などの好意が他の子どもに向けられた」は合わせて14人（6.5%）であった。

3) 『大切なものや能力に関する嫉妬』では、「自分も欲しい能力を親しい人（子ども）が持っている」が42名（19.5%）、「自分も欲しいものを親しい人（子ども）が持っている」が18名（8.4%）であった。

4) 表1の構成パーセントは、年齢毎に8分類の嫉妬の比率を示すものである。

これを、『人の好意・愛情に関する嫉妬』について見ると、1～8才では「父母の愛情が兄弟姉妹に向けられた」がどの年齢でも50%を超え、「自分にとって大切な友達の好意が他の子どもに向けられた」は5才～15才にかけて出現し、「好意を抱いている異性の好意が他の子どもに向けられた」は10才以降に出現するようになり、この嫉妬体験は14才以上になると出現率が8分類の中で最大となり、特に16才以降では50%を超え、19才では73.3%を示した。

『欲しいものや能力に関する嫉妬』では、「自分も欲しいものを親しい子ども（人）が持っている」は、4才～20才までにかけて出現（10%前後）し、「自分も欲しい能力を親しい子ども（人）が持っている」は、9才以後になって20%以上の出現率を示し、15才～17才では30%水準の出現率を示した。

表1 嫉妬体験の年齢別頻度

年齢	父母や親しい人の好意・愛情に関する嫉妬										欲しいものや能力に関する嫉妬				合 計					
	父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた		大切な友達の好意が他の子どもに向けられた		父母や周りの賞賛が兄弟姉妹や他の子どもに向けられた		可愛がってくれる年長者の愛情が他の子どもに向けられた		その他先生などの好意が他の子どもに向けられた		好意を抱いている異性の好意が他の子どもに向けられた		自分も欲しいものを親しい人・子どもが持っている		自分も欲しい能力を親しい人・子どもが持っている		年齢別合計		年齢区分別合計	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
1～4	13	81.3											2	12.5	1	6.3	16	7.4	26	12.1
5	7	70.0	3	30.0													10	4.7		
6	6	60.0	2	20.0	1	10.0							1	10.0			10	4.7	25	11.6
7	7	77.8					1	11.1					1	11.1			9	4.2		
8	3	50.0					1	16.7					2	33.3			6	2.8		
9			2	50.0											2	50.0	4	1.9	28	13.0
10	3	23.1	1	7.7	2	15.4	1	7.7	1	7.7	2	15.4	1	7.7	2	15.4	13	6.0		
11	1	9.1	3	27.3	1	9.1					2	18.2	1	9.1	3	27.3	11	5.1	28	13.0
12	4	44.4					1	11.1	1	11.1	1	11.1			2	22.2	9	4.2	33	15.3
13			3	33.3	1	11.1			1	11.1	2	22.2			2	22.2	9	4.2		
14	2	13.3	1	6.7					1	6.7	7	46.7	1	6.7	3	20.0	15	7.0		
15			4	28.6							5	35.7	1	7.1	4	28.6	14	6.5	42	19.5
16											7	50.0			7	50.0	14	6.5		
17			1	7.1							8	57.1	1	7.1	4	28.6	14	6.5		
18	1	4.2									16	66.7	3	12.5	4	16.7	24	11.2	61	
19							1	6.7			11	73.3	1	6.7	2	13.3	15	7.0		
20			1	6.7							9	60.0	1	6.7	4	26.7	15	7.0		
21～26											3	42.9	2	28.6	2	28.6	7	3.3		28.4
計	48	21.9	21	9.8	4	2.3	5	2.3	4	1.9	73	34.0	18	8.4	42	19.5	215	100.0	216	100.5

2. 憎い体験の分布

憎い体験の分類カテゴリーごとの頻度は表2に示すものであった。

1) 憎いという感情を最も強く感じた体験・出来事は、1位「大切な人・物を奪われた」で29名(13.4%)であった。次いで2位「人からの非難・侮辱」が24名(11.1%)、3位「人・動物からの行動による被害」が23名(10.6%)であった。また、憎い体験の頻度の低いものは、「約束を破られる」の3名(1.4%)、「努力が報われない」の4名(1.8%)、「自分自身に対して」の5名(2.3%)などであった。

表2 憎い体験の分類カテゴリー毎の頻度（全体）

分類	度数	%	分類	度数	%
1. 自分の意見が通らない	11	5.1	10. 道理に合わない出来事	14	6.5
2. 人からの非難・侮蔑	24	11.1	11. 他者の身勝手な行為	18	8.3
3. 無視、疎外、孤立化	7	3.2	12. 約束を破られる	3	1.4
4. 人からの酷い仕打ち	13	6.0	13. 喧嘩	13	6.0
5. 人からの裏切り	10	4.6	14. 努力が報われない	4	1.8
6. 人・動物からの行動による被害	23	10.6	15. 社会的な出来事	7	3.2
7. 大切な人・物を奪われる	29	13.4	16. 「なし」	8	3.7
8. 親しい人への攻撃・非難	10	4.6	17. その他	18	8.3
9. 自分自身に対して	5	2.3			

(N=217)

2) 憎い体験と年齢

「憎い」という感情を最も強く感じたのは何歳くらいの出来事だったのかについて集計した。なお、「なし」としたものと年齢が記入されていない者は2名で207名の分布である。年齢が数値ではなく「5～6歳」など複数記述されている場合は、下限の年齢をとって5歳とし、「小学生」「中学生」「高校生」などと記述されている場合には中間をとって小学生は10歳、中学生は12歳、高校生は15歳、また「数日前」などは20歳としたものである。

年齢毎の分布は図1の通りであるが、憎い体験は3歳から24歳まで分布し、20歳が25名（12.1%）で最も多く、17歳が23名（11.1%）、19歳が21名（10.1%）であったが、おおよその傾向としては、年齢が高くなるにつれて（調査時点に近づくに従って）増大することが示された。

3) 表3は、年齢毎に憎い体験の出現頻度を見たものであるが、「大切な人・物を奪われた」や、「人・動物からの行動による被害」は4歳から20歳まで広く分布し、「人から非難・侮辱」の体験も6歳から20歳までにみられた。特徴がみられた項目は「自分自身に対して」で12歳以上に限

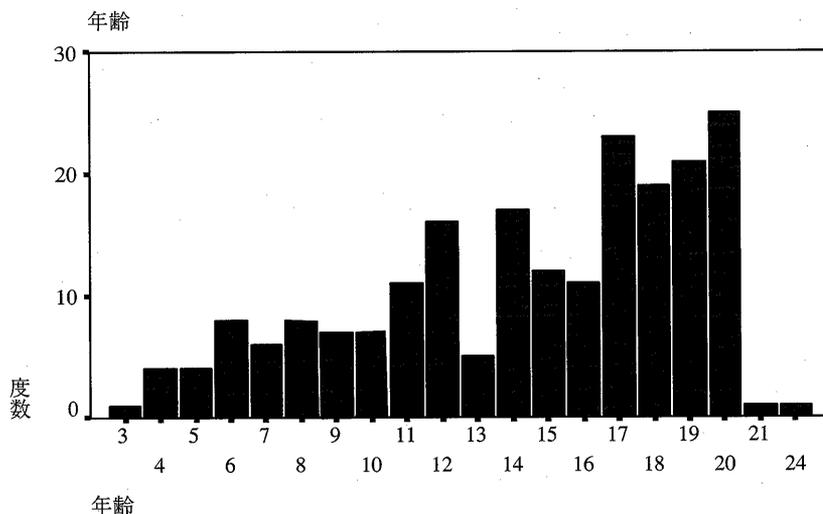


図1 憎いと最も強く感じた体験・出来事の年齢

られ、「社会的な出来事」に対して憎いという感情体験を持つは16歳以上になってからであった。最も低年齢の3歳の体験は「父が私を叱った時、母が私をかばい、父と母が大喧嘩になったとき、父に対して思った」で、カテゴリーとしては「親しい人への非難・攻撃」に分類されるものであった。24歳の体験で「その他」に分類されたものは「自分の子どもの頃をふり返ったとき、親から愛情を一心に受けていただけでなく恐怖に近い感情も味わっていたということに気づいたとき」とするものであった。

表3 憎い体験の年齢別頻度

年齢	1. 自分の意見が通らない	2. 人からの非難・侮蔑	3. 無視、疎外、孤立化	4. 人からの酷い仕打ち	5. 人からの裏切り	6. 人・動物からの行動による被害	7. 大切な人・物を奪われる	8. 親しい人への攻撃・非難	9. 自分自身	10. 道理に合わない出来事	11. 他者の身勝手な行為	12. 約束を破られる	13. 喧嘩	14. 努力が報われない	15. 社会的な出来事	17. その他	合計
3								1								1	
4						1	1	1				1				4	
5					1	1				1		1				4	
6	1	3					1	1		1		1				8	
7					1	1	2	1						1		6	
8		1				4				1		1			1	8	
9		1		1		3				1		1				7	
10			1	1		2	2			1						7	
11		4				1	2			1			2			11	
12			1	1	2	2	3		1	1			3		1	16	
13	1			1	1			1			1				2	7	
14		3	1	1		2	1				4	1	2		1	17	
15	4	3		1			1			1	1					12	
16					1	2	2	1	1	1	1		1		1	11	
17	3	3	1	1		1	4	1		2	3	1	1		11	23	
18	1		1	1	1		2	1	1		2		1	2	3	3	19
19	1	3		1	2	1	3			3	3					4	21
20		2	2	4	1	2	5	1	2	1	2				2	1	25
21																1	1
24																1	1
合計	11	24	7	13	10	23	29	10	5	14	18	3	14	3	7	16	207

(数値は度数)

2. 怒り体験の分布

「怒り」体験の分類カテゴリー毎の頻度は表4に示すものであった。

1) 怒りを強く感じた体験・出来事は、1位「人からの非難・侮辱」で29名（13.2％）であった。ついで、2位「人の身勝手な行為」（28名、12.8％）、3位「人からの酷い仕打ち」（23名、10.5％）であった。

表4 怒り体験の年齢別頻度

年齢	1. 自分の意見が通らない	2. 人からの非難・侮辱	3. 無視、疎外、孤立化	4. 人からの酷い仕打ち	5. 人からの裏切り	6. 人・動物からの行動による被害	7. 大切な人・物を奪われる	8. 親しい人への攻撃・非難	9. 自分自身	10. 道理に合わない出来事	11. 他者の身勝手な行為	12. 約束を破られる	13. 喧嘩	14. 努力が報われない	15. 社会的な出来事	17. その他	合計
4							1	1									2
5		1					1										2
6							1										1
7		1				1						1	1				4
8		3		2		2	1			1		1	2				12
9		1		1				1		2			1				6
10		1		1		1		1		1			1		1		7
11				2			1	2		1			1				7
12		1	1			1				1	1		2				7
13				1	1						4					1	7
14		2				1	1	1			3	3		1			12
15		2		2	1	1		1		2	2	1		1		1	14
16				1	2	1	1	3		1	2		2	1		1	15
17	1	2	1	2		1	1		1	1		1			5		16
18	3	5		6	1		1	2	3	5	4		1		1	4	36
19	2	5		3	1	2		2	1	5	6	4	1	2	1	1	36
20	1	5		3	2	2	2	1	1		3				3	2	25
21		1				1				1	1				1	2	7
22											1						1
24									1						1		2
合計	6	29	3	23	10	13	11	16	6	21	28	9	13	7	12	12	219

(数値は度数)

一方、出現頻度の少なかったものは、「無視、疎外、孤立化」(3名、1.4%)、「自分の意見が通らない」(6名、2.7%)、「自分自身に対して」(6人、2.7%)であった。

2) 怒り体験の年齢分布

怒りをもっとも強く生起させる出来事を経験した年齢の範囲は4歳から24歳であったが、低年齢から現在の年齢までほどの年齢層にもみられるカテゴリーと、ある一定の年齢になってから出現するカテゴリーがあることが示された。低年齢から現在まで分布している体験は、「人からの非難・侮辱」(29名、13.2%)、「人からの酷い仕打ち」(23名、10.5%)、「道理に合わない出来事」(21名、9.6%)、「親しい人への攻撃・非難」(16名、7.3%)、「喧嘩」(13名、5.9%)、「大切な人・物を奪われた」(11名、5.0%)、であった。

一方、ある一定の年齢になってから出現する怒り体験は、「他者の身勝手な行為」(28名、12.8%)、「人からの裏切り」(10名、4.6%)、「自分自身に対して」(6名、2.7%)、であった。これらが出現し始める年齢をみると、「他者の身勝手な行為」は12歳以降、「人からの裏切り」は13歳以降、「自分自身に対して」は18歳以降であった。

考 察

1. 嫉妬の内容の発達的变化について

本研究における調査は、「これこれの嫉妬をはじめて感じたのは何才頃であるか」ではなく、「今までの体験の中で、嫉妬の感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して」記述してもらうものであった。しかしながら、表1に示された結果は、「嫉妬」の感情が発達的に変化する様子を示唆している。

すなわち、1才～4才の頃、嫉妬体験の感情はもっぱら「父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた場合」に生じる。このことは、この頃の子どもが父母との関係を中心とする世界で生きていることと一致している。

子どもは成長するにつれ、父母との世界だけでなく子ども同士の世界もまた大切なものとなる。嫉妬の感情も「自分にとって大切な友達の好意が他の子どもに向けられた場合」(5才～15才)に生じるようになる。

さらに子どもは、異性の友達との世界が大切になる。10才以降「行為を抱いている異性の好意が他の子ども(人)に向けられた場合」に嫉妬の感情が出現し、14才～20才の思春期・青年期には、このような異性・恋人に関係する嫉妬が主役となる。

また、嫉妬の感情は「自分も欲しい能力を親しい子ども(人)が持っている」場合にも生ずるが、これの出現は9才以降であり特に高校時代(15才～17才)に顕著に高まる。

2. 嫉妬の構造

嫉妬の内容の発達的变化は、乳幼児期には「父母の愛情」と結びついて、学童期には父母の愛情とともに「大切な友達の好意」とも結びついて、思春期・青年期には「異性の好意」に係わっていることを示した。これらはいずれも、嫉妬の感情が、その生活と人生において最も大切と思っている人からの愛情・好意が自分ではなく他の人に向けられていると感じた時に生ずるものであるが、この愛情・好意は自分に属するものではなく大切と思っている人の意志に属するもの、という特徴を持っている。また嫉妬の感情は、嫉妬の感情が向けられる対象が、自分の身近な存在

または比肩しうる存在であるという特徴も持っている。

このことは、『大切なものや能力に係る嫉妬』についても同様で、自分も所持・保有したいと思っている「大切なもの」や「大切な能力」が自分になく身近で比肩しうる存在（友達）が持っている場合なのである。

以上から、『嫉妬の構造』は次の図2～図4にまとめることができる。

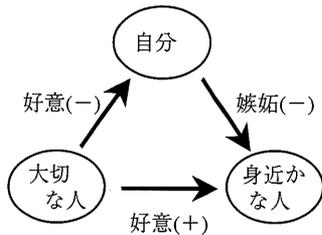


図2 好意・愛情に関する嫉妬

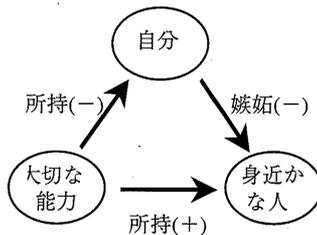


図3 能力に関する嫉妬

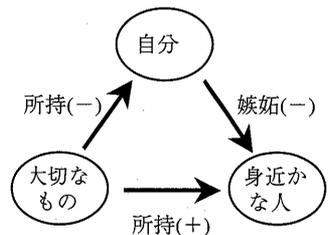


図4 ものに関する嫉妬

すなわち、図2好意・愛情に関する嫉妬は、「自分」と「大切な人」との関係での「好意」がマイナス（-）で、「大切な人」と「身近な人」との関係に「好意」がプラス（+）に感じられる時、「自分」の「身近な人」に対する感情はマイナス（-）の「嫉妬」感情が生ずることを示し、図3能力に関する嫉妬（および、図4ものに関する嫉妬）は、「自分」と「大切な能力（および、もの）」との関係で「所持」がマイナス（-）で、「大切な能力（および、もの）」を「身近な人」が「所持」（+）の場合に、「自分」の「身近な人」への感情はマイナス（-）となり、「嫉妬」の感情が生ずることを示すものである。

なお、図2の構造は、より一般化するならば、ニューカム（1971）の均衡理論における3者関係に類似するが、「嫉妬」感情は、図2の「大切な人」が「自分」に対し好意（+）を向けたとしても同時に「大切な人」が「身近な人」に対しても好意（+）を向けるならば「嫉妬」を覚えることもあり、単純ではない。

3. 「憎い」という感情を最も強く抱いた体験

憎いという感情は「大切な人・物を奪われた」体験に対して感じられることが多い（13.4%）。このカテゴリーに分類された29名の体験をさらに詳しく検討すると、「大切な人を奪われた」体験が22名（75.9%）、「大切な物を奪われた」は7名（24.1%）であった。このことは、「大切な人を奪われた」という体験が憎いという感情と共に強く記憶されることが多いことを示すと考えられる。

また、次いで多かった「人からの非難・侮辱」体験（11.1%）では、「バイト先の社員に自分の夢に対する姿勢を侮辱された」のように、人からの非難によって自分の大切なものを壊された体験、「尊敬している先生に悪口を言われた」「大切な人に傷つくことを言われた」など自分にとって重要な人からの非難や侮辱もまた自分にとって大切なものを壊された体験でもある。日本語には家族や親類など親しい人を指す「身内」という言葉があるが、自分の身のうちに位置する大切なもの（恋人・友人・夢）を奪われる・壊される時に憎いという感情を最も強く体験するといえる（図5参照）。

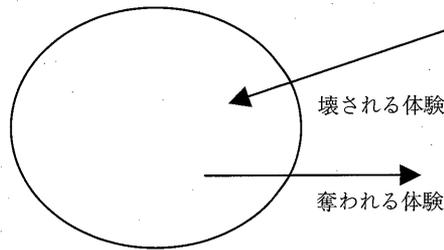


図5 憎い感情と体験

さらに、「人・動物からの行動による被害」では「自分に精神的な傷を残された」「従兄弟にバックドロップをかけられ怪我をし、その怪我がもう治らないとわかった時」「クラゲに刺されたこと。まだ跡が残っている」のように、体験による影響が現在まで継続しているものがみられた。その時の痛手よりも、それが継続して不利益を生じる場合にその体験は憎いという感情を引き起こす。

逆に少なかった体験は「約束を破られる」体験（1.4%）であった。「友達に約束を破られた」ことは不快な体験ではあるが、不快感だけでは憎いという感情にいたらないのかもしれない。また1.8%しか出現しなかった「努力が報われない」体験は、「友人が自分より上位の大学に受かったとき」「剣道の試合にて、負けた相手に対して」などであり、自分の努力が報われないとき、努力が報われた対象に対して生じている。自分が努力したものであるからこそ憎い感情が強まってもよいと思われたが、受験や試合といった外的基準による結果は、あまり憎しみの対象とはならないと思われた。

「自分自身に対して」（2.3%）は「高3の時に受験があるのに遊んでばかりで、大口を叩いていたくせに、全て失敗した自分」に代表されるように自己批判のニュアンスを含んでいる。宮城（1963）は「憎しみは不安に対する外罰的反応である」と述べているが、今回の結果からも他者からの非難は憎い体験として感じられやすく、自己批判は憎いという感情になりにくいと思われる。その理由としては、自己批判が憎いのような強い感情とつながれば自己嫌悪をもたらし、不適応をおこしかねない。憎い対象は自分の外に置くことで、安定を図ろうとする心の機能が働いているのではないだろうか。

今回の分類カテゴリーは、被検者の自由記述をもとに作成されたが、「なし」と「その他」を除く15項目は大きく①他者からの行為（「人からの非難・侮辱」「人からの酷い仕打ち」「人からの裏切り」など）②自分の行為（「自分自身に対して」）③社会的事象（「社会的な出来事」）に分けられる。対象の分類カテゴリーを①人に対するもの②物に対するものなどの視点から分類する試みも必要と思われ、今後の課題としたい。

4. 憎い体験と年齢の関係

憎いという感情を最も強く抱いた体験は年齢と共に増加していた。今回の調査は「初めて憎いという感情を抱いた体験」ではなく、最も強く抱いた体験という教示のために最近のことが浮かびやすいのは当然である。最も低い3歳時の「父が私を叱った時、母が私をかばい、父と母が大喧嘩になったとき、父に対して思った」という体験も「今振り返ってみれば」憎いとネーミング

できることなのかもしれない。

年齢と分類カテゴリーとの関連では、最も強く抱いた体験として自分自身が対象となる「自分自身に対して」が12歳以上、「社会的な出来事」が16歳以上という特徴を示した。内界と外界という逆方向ではあるが、自己が確立される年齢になって、はじめて自分や社会を対象として捉えることができると考えられる。今後、発達の視点を含めた研究によって、明らかにすることが必要である。

5. 怒りを最も強く抱いた体験

「怒り」は「人からの非難・侮辱」体験に対して感じられることが最も多い（13.2%）。これらは具体的には、「友達と遊んでいて遅くなり母親に怒られたとき」「バイト先で小言を言われたとき」という一方的に他者から責められたり、「友達が自分の気にしていることを冗談めかして言ったとき」「友達に自分の夢をけなされたとき」など自分にとって重要なことや気にしている事柄について他者から非難されたり侮辱された場合である。これらはいずれも個人の尊厳やプライドが傷つけられるという特徴を持っている。

次に多かったものは「他者の身勝手な行為」（12.8%）であった。これは具体的には「掃除当番なのに全くやらない人を見たとき」、「部活で練習しないチームメイトがいたとき」、「クラス班別の発表で班員のやる気のなさ」などであるが、これらに共通しているのは、集団のルールや役割として果たさねばならない義務や責任に対して、ある人がそれを満たしていないという状況である。このように「怒り」は、社会規範から逸脱している他者に対して生起される感情という特徴を持っている。

3番目に多かったカテゴリーは「人からの酷い仕打ち」（10.5%）であるが、その内容は、「祖母に日記を読まれたとき」「秘密をばらされたとき」「自分の考えを意図的に間違ったように伝えられたとき」などであった。これらは、自分の内面が侵害されたり、不利益を受けている状況であり、ここからは、「怒り」が、他者によって自分の内的な領域が侵害されたり不利益を与えられた場合に生起する感情であるという特徴が示唆される。

ところで、怒りを生起させる出来事としてもっとも少なかったカテゴリーは、「なし」（0%）で、怒りという感情を経験したことがない者はいない。このことは、怒りが日常的で、誰にでも共通して認められる感情であるということを示めている。

6. 怒り体験と年齢の関係

怒り体験と年齢の関係では、「人からの非難・侮辱」、「人からの酷い仕打ち」、「道理に合わない出来事」、「親しい人への攻撃・非難」、「喧嘩」、「大切な人・物を奪われた」は低年齢から出現するのに対して、「他者の身勝手な行為」は12歳以降になって出現する出来事であること、また「自分自身に対して」は18歳以降になって出現するということが示された。そこでこれらのカテゴリーの相違点を見ると、「人からの非難・侮辱」～「大切な人・物を奪われた」など前者の出来事は個人的行動規範や個人的基準に判断の基準があると考えられるものであり、これに対し「他者の身勝手な行為」は、社会規範やルールあるいは集団における役割に判断の基準がある。このことは個人の感情的な判断基準が、社会規範や集団の役割意識の獲得に先行することと一致する。また、怒りの感情が「自分自身に対して」生起するのは18歳以上であることは、自省力や内省力がある程度の年齢以上にならないと十分には育たないことと一致する。怒りの感情もま

た、発達的に変化することを示すものであろう。

7. 憎い体験と怒り体験の関係

本研究においては、形式的には憎い体験と怒り体験は同一のカテゴリーを用いて分類することができた。また、体験の具体的記述が同じであるのに、ある者は憎い体験としある者は怒り体験として記述することも見られた。このことは、憎いと怒りの感情がかなりの程度類似したものであることを推測させる。

両体験の出現頻度が同じ程度のものは「人からの非難・侮辱」(憎い24、怒り29)、「喧嘩」(14、13)、「人からの裏切り」(10、10)であったが、これらの事象はいずれの感情をも生起させるものと考えられる。

また、「他者の身勝手な行為」(憎い18、怒り28)、「人からの酷い仕打ち」(13、23)、「道理に合わない出来事」(14、21)は怒りの感情を体験する者が多く、反対に「大切な人・物を奪われる」(憎い29、怒り11)、「人・動物からの行動による被害」(23、13)は憎い感情とする者が多く見られた。これらは、どちらかという、憎いとする感情が自身の直接的な被害により結びつき、怒り感情がより間接的な事象に対しても生起するという違いを持つことを推測させる。

課 題

本研究は、感情語を提示して、その感情を最も強く抱いた体験を自由に記述してもらったものであった。その意味では、記憶された感情体験の想起をもとにした感情研究であって、対象や事象に直面した時の感情状態そのものではない。しかし、対象や事象を想起してもらってその想起された対象や事象に対する感情状態を喚起してもらった感情イメージではなく、感情そのものを研究対象にしたものである。

本研究の限界は、上記したように記憶されている感情体験の想起に基づいていることである。また、調査した感情体験は20感情であるが、今回は、そのうち嫉妬・憎い・怒りの3感情の分析にとどまった。今後、残る17感情について分析し、感情間の関係を明らかにすることが残されている。さらに、今回の3つの感情間の関係も嫉妬と他の感情との関係さえ分析できていない。また、臨床的には人それぞれの感情体験や感情イメージの理解は、それぞれの個人の理解において、かなり本質的なものであると考えられる。本研究は、まずは平均的な感情理解を試みるものではあるが、そのような感情理解が個人および臨床的にどのような意味をもつのかも考えなくてはならない。今後の課題である。

参考文献

Plutchik, R., The multifactor - analytic theory of emotion, J. of Psychol. 50, 153-171, 1960

宮城音弥 愛と憎しみ——その心理と病理—— 岩波新書 1963

上杉 喬 感情イメージの研究 人間科学研究 第3号 22-38 1981

上杉 喬 感情イメージの研究(Ⅱ)——労働場面における感情イメージ—— 人間科学研究 第4号 別冊 29-40 1983

上杉 喬 感情イメージの研究(Ⅲ)——労働場面における感情イメージの諸連関—— 人間科学研究

第5号 11-20 1984

上杉 喬 感情イメージの研究 (IV) ——対象による違いと性による違い—— 人間科学研究 第11号
1-11 1989

上杉 喬 感情イメージの研究 (V) ——SD法による感情イメージの検討—— 人間科学研究 第20
号 68-77 1998

上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究 (VI) ——感情価とパーソナリティ特性の関連—— 生活科学
研究 第22集 121-132 2000